

南海蒼空戦記6

帝都航空決戦

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章 成層圏の脅威

9

第二章 戦略航空軍の選択

39

第三章 「日没」サンダウン作戦

69

第四章 北の猛禽もうきん、南の巨鳥

101

第五章 銀翼の防人さきもり

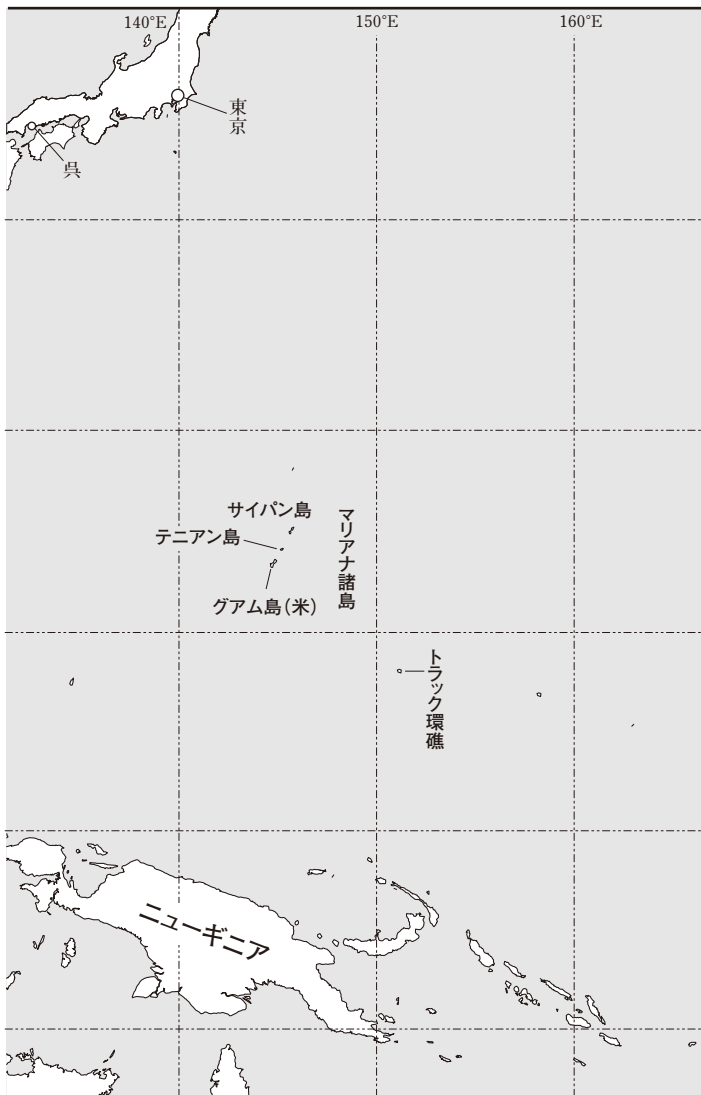
127

第六章 解かれた重責

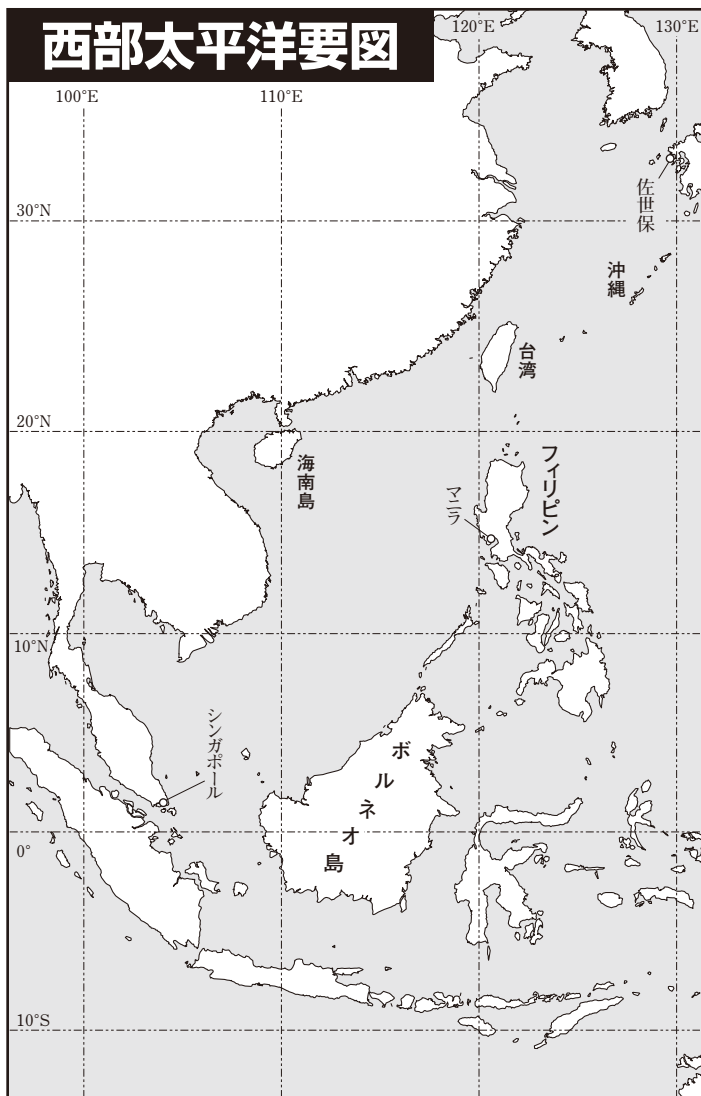
235

あとがき

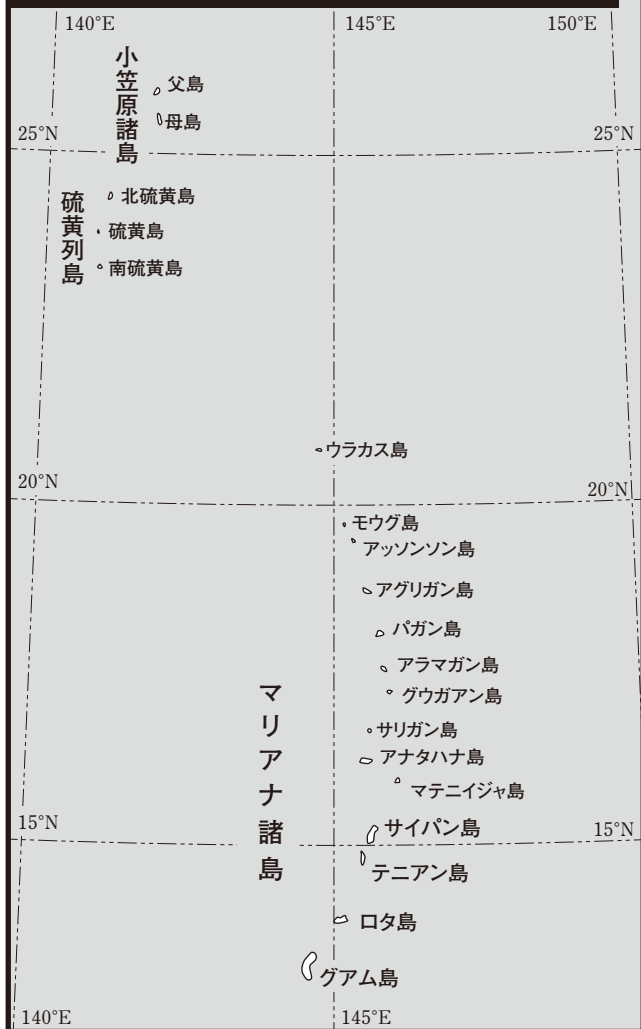
250



西部太平洋要図



小笠原諸島・マリアナ諸島詳細図





南海蒼空戰記 6

帝都航空決戦

第一章 成層圏の脅威

1

日本本土に初めての空襲警報が発令されたのは、昭和一九年一〇月三十一日の夕刻だった。

一七時一〇分、愛知県名古屋、岡崎、豊橋、半田三重県の四日市、津等の市民は、出し抜けに鳴り響き始めた不吉な音に足を止め、不安げな様子で日が暮れたばかりの空を見上げた。

愛知県や三重県の軍需工場——三菱名古屋航空機製作所、中島飛行機半田製作所、四日市の海軍第二燃料廠等の職員も、作業の手を止め、互いに顔を見合わせた。

「中部軍管区、警戒警報発令。敵大型機の編隊、熊野灘を北上しつつあり。敵の目標は名古屋の公算大なり」

告げ報せるアナウンサーの声が、ラジオから流れ始めた。

名古屋市内は、たちまち騒然となった。

昭和一二年に竣工した名古屋駅の周辺でも、繁華街がある栄町でも、名古屋城の付近でも、警察官や在郷軍人会の人々が市民に退避を呼びかける。

多くは名古屋駅、名古屋城、栄町のデパート、企業のビル、学校、病院等に避難する。

防空壕には、女性や子供が優先的に収容され、商店街では、商店や市場、食堂、居酒屋等が臨時の避難所に早変わりし、人々を迎え入れる。

主だった軍需工場でも、避難が始まる。

従業員は作業を中断し、工場の構内に設けられた防空壕へと逃げ込む。

名古屋周辺の航空基地では、夜間戦闘機隊が出撃を開始している。

愛知県小牧の陸軍飛行場に展開する飛行第五戦隊の四式複座戦闘機「黒龍」と二式複座戦闘機「屠龍」の混成編隊が、真っ先に飛び立った。

「黒龍」は、海軍の夜間戦闘機「極光」の陸軍仕

様機だ。基本性能や兵装は極光と同じだが、計器は海軍仕様機と若干の差異がある。

海軍が、極光一機と夜間戦闘機「月光」四機で小隊を組んでいるのと同様、陸軍でも黒龍一機と屠龍四機を一個小隊としている。

黒龍の空六号電探で敵機を探知し、屠龍を誘導するのだ。

黒龍自身も、三〇ミリ機関砲と二〇ミリ機関砲各二門の重火力で、敵機を攻撃する。

丸っこい独特の機首を持ち、前方に電探用のアンテナを突き出した黒龍と、尖った機首を持つ屠龍が、続々と小牧飛行場より発進し、まだ日が暮れてから間もない空へと舞い上がってゆく。

知多半島常滑の上空で、黒龍と屠龍、合計四〇機が集結し、編隊を組む。

「情報。敵編隊、潮岬の東方海上を北進中。名古屋の南方一七〇キロ。高度五〇〇〇」

地上の戦闘指揮所が、無線電話機を通じて、敵の

位置を伝えて来る。

中部軍管区は、紀伊半島南端の串本、渥美半島の伊良子等、五箇所に電探基地を擁している。

それらが敵影を捉え、戦闘指揮所で整理された情報が、戦闘機隊に送られて来るのだ。

情報を受け取った戦闘機隊が、進撃を開始する。

この日の月齢は一四。

満月の柔らかな光が投げかけられる中、四〇機の夜間戦闘機は、日本本土を侵さんとしている敵重爆の編隊を求め、伊勢湾の上空を南下する。

敵機との距離はまだ遠いが、地上の複数箇所に設置された電探は、刻々と変化する敵機の位置を的確に捉え、戦闘機隊に伝えて来る。

「高度五〇〇〇とは、意外に低めですね」

第三小隊長を務める香取公秀中尉の耳に、後席に乗る及川望軍曹の声が届いた。

電探が捉えた敵機が、ボーイングB29スーパーフォートレス——かねてから警戒されていた米軍

の最新鋭四発重爆撃機であることは間違いない。

そのB 29が、初めて日本軍の前に姿を現したのは五月一二日だ。

このときは、九〇〇〇メートルの高高度から硫黄島上空に侵入し、飛行場を爆撃して飛び去った。

機数は僅か四機だったが、迎撃に上がった海軍の飛電は鹵が立たず、敗退を余儀なくされている。

高高度での戦闘に対応した飛電二二型も、高度九〇〇〇メートルともなれば上昇力が落ちるため、B 29に致命傷を与えるには至らなかったのだ。

米側から見れば、高高度から進入すれば、比較的 safety に投弾できることになる。

にも関わらず、敵機は五〇〇〇メートルと、やや低めの高度を取っている。

「敵は、よほど自信があるのかもしれない」

と、香取は答えた。

海軍の戦闘詳報によれば、B 29はボーイングB 17 フライニング・フォートレスやコンソリデーテッ

ドB 24 リベレーターよりも強力な防御火器を持ち、装甲も厚く、二〇ミリ弾を命中させても容易に火を噴かなかったという。

B 29は、高高度における飛行性能よりも、火力と防御力で飛電を寄せ付けなかったことをうかがわせる。

米軍は「日本機、恐るるに足らず」と考え、敢えて高度五〇〇〇メートルから進入を図っているのは、と香取は推測していた。

「屠龍はどうだ？ ついて来てるか？」

香取は、気がかりなことを聞いた。

指揮官の任務は、「部隊全体で大きな戦果を上げること」だ。麾下の屠龍四機を誘導し、敵機に取り付けせることが、何より重要になる。

「全機、続行中です」

「了解した」

及川の即答を受け、香取は短く返答した。

飛行第五五戦隊は、夜間戦闘専門の戦闘機隊とし

て編制された部隊だ。

全員が、技量「甲」の持ち主で占められ、夜間の編隊飛行や空中戦の訓練を入念に積んでいる。

途中ではぐれた機体がないと知り、香取は満足感を覚えていた。

飛行第五戦隊は、上昇しつつ南下を続ける。

伊勢湾上空はとうに過ぎ、熊野灘の上空に入っている。

右方には紀伊半島の東岸が横たわっているはずだが、目を凝らしても何も見えない。

視界内に入る光は、東から差し込む月光と無数の星々、各機の標識灯と排気炎だけだ。

「敵編隊、針路、速度とも変化なし。貴隊とは、五分以内に接触する」

戦闘指揮所が新たな情報を送ってきた。

「いよいよだぞ」

香取は、及川に呼びかけた。

五月一二日の硫黄島空襲は、B 29の実戦テストだ

つたと推測されている。

今回は、本番だ。B 29は日本本土を爆撃し、日本の継戦能力に打撃を与えるべく来襲したのだ。

「一発たりとも投弾を許さず」

そのつもりで迎撃に当たる旨、全員が出撃前に訓示を受けている。

B 29はまだ視界に入らないが、米軍が誇る巨大な四発重爆の気配を、香取は感じ取っていた。

「電探、感四！ 敵機、正面。高度差五〇〇！」

戦隊長深山源太郎少佐の声が、レシーバーに飛び込んだ。

香取は、前上方を見上げた。

おぼろげな月明かりの中、四発機の機影がぼんやりと浮かび上がっている。機体の右半面が、鈍い銀色に照り輝いている。

深山戦隊長以下、飛行第五戦隊の戦闘機乗りたちが初めて目の当たりにするB 29の姿だ。

「本機の電探にも映りました！」

及川が叫んだときには、飛行第五戦隊の黒龍、屠龍とB 29の編隊は、五〇〇メートルの高度差を置いてすれ違っている。

頭上に、多数の発射炎が閃いた。青白い多数の曳痕が、驟雨のように降って来た。

陸軍の夜戦隊とB 29の初対決は、B 29の先制攻撃によって幕を開けたのだ。

幸い、被弾した機体はない。

頭上から襲って来た敵弾は、闇の底に吸い込まれるように消えている。

「全機反転！ 攻撃開始！」

「三小隊、反転。俺に続け！」

深山戦隊長の命令を受け、香取は三小隊の全機に命じた。

操縦桿を倒し、左の水平旋回をかけた。

僚機の機影が右に流れ、左に見えていた月が右に移動する。

反転を終えたときには、香取の黒龍は、B 29編隊

の後ろ下方に付けている。

「敵機との距離一六〇〇、高度差五〇〇！」

「屠龍を誘導する！」

及川の報告を受け、香取は宣言するように叫んだ。エンジン・スロットルを心持ち開き、操縦桿を手前に引いた。

自分だけならフル・スロットルで突進するところだが、屠龍の誘導機としての役割を考えれば、それはできない。

黒龍と屠龍には、一〇〇キロ以上の速力差があるため、スロットルを開き過ぎると、屠龍の空中勤務者が黒龍を見失ってしまうのだ。

「一二〇〇……一〇〇〇……」

最も近い位置にいる敵機との距離を、及川が電探から読み取り、報告する。

B 29からの銃撃はない。

後ろ下方から接近する黒龍や屠龍を、視界に捉えられないのかもしれない。

距離が五〇〇メートルまで縮まったとき、後続する屠龍が動いた。

エンジン・スロットルをフルに開いて加速し、B29に肉迫した。

屠龍の姿に気づいたのか、B29の尾部と下腹に発射炎が閃く。青白い曳痕の連なりが屠龍を絡め取るべく、左右に振り回される。

第三小隊の屠龍は、敵弾をかくくぐるようにして、

B29の後ろ下方に付けた。

愛川悟少尉と木下勇軍曹の二番機が、胴体上面に発射炎を閃かせ、二条の火箭が噴き延びた。

操縦室後方に、前上方に向けて装備した二〇ミリ機関砲二門が火を噴いたのだ。

最初の一連射は、B29の右主翼をかすめただけで終わったが、二度目の射弾は狙い過たず、四番エンジンに吸い込まれた。

二番機とほとんど同時に、福本春雄曹長と仁瓶友吉伍長の三番機もB29一機に食い下がり、二〇ミリ

弾を浴びせている。

二機のB29が、ぐらついたように見えたが――
「駄目か！」

その声が、香取の口から漏れた。

一、二番機が銃撃を浴びせたB29は、火を噴かない。編隊の定位置を保ち、飛行を続けている。

屠龍の二〇ミリ機関砲は、致命傷を負わせるには至らなかったのだ。

四、五番機も、香取の黒龍を追い抜き、B29に突進する。

二、三番機同様、敵機の下腹に潜り込み、二〇ミリ機関砲二門を発射する。

これも、効果はない。

二〇ミリ弾が命中したB29は、僅かによりめくが、それ以上のことは起こらない。

上に向かって撃ち上げるため、十分な貫通力を得られないのかもしれない。

「香取一番より三小隊――」

香取が小隊各機に呼びかけようとしたとき、B 29の反撃が始まった。

尾部と胴体下面に発射炎が閃き、火箭が噴き延びる。一二・七ミリ弾の火箭が左右に振り回され、青白い曳痕が乱れ飛ぶ。

第三小隊の四番機——倉田恒夫軍曹と西健太郎伍長の屠龍が、最初に被弾した。

青白い火箭が右主翼に突き刺さった直後、後方に黒煙をなびかせ、機首を大きく下げる。

そのまま高度を落とし、闇の底へと姿を消す。

続けて、松島元美伍長と酒田正一兵長の五番機がやられる。

青白い曳痕が突き刺さると同時に、左主翼の上に火焰が躍り、機体全体を包み込む。

「飛行機の形をした炎の塊」に変わった屠龍は、機首を大きく下げ、真つ逆さまに墜落する。

長く引きずられる炎が闇を切り裂くが、それはほんの一瞬だ。

下方で爆発光が閃き、無数の火の粉が風に吹き散らされて消える。

このときには、多数のB 29が対空射撃を開始している。

敵の機銃手も、黒龍や屠龍の機影をはっきり視認できないのだろう、一二・七ミリ弾の火箭は闇雲に振り回されている。

香取機の左前方で、屠龍一機が被弾する。

先に墜とされた倉田機同様、エンジンに敵弾が命中したのか、黒煙を引きずりながら高度を落とす。

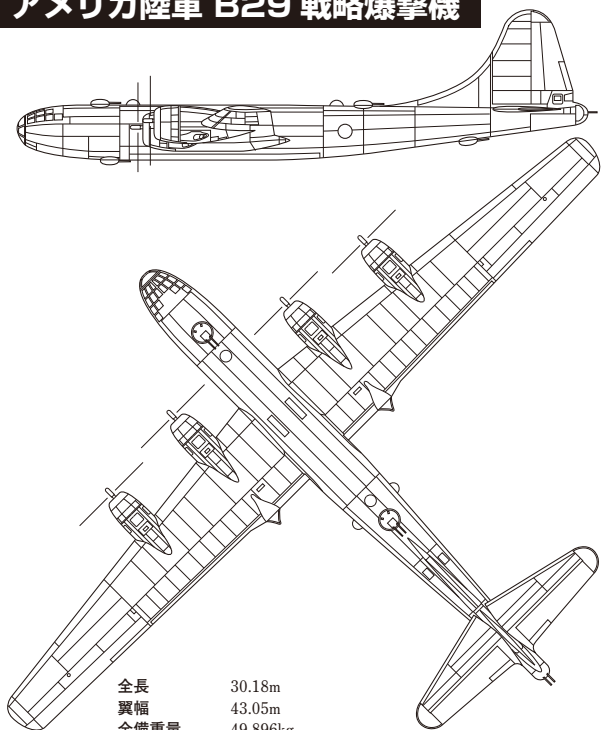
続いて右前方で、屠龍一機が、胴体の真上から射弾を浴びる。

火箭がコクピットの前から後まで駆け抜けた直後、屠龍の姿は一瞬で消失し、出現した炎の雲が闇を吹き払う。

B 29の射弾は、二〇ミリ機関砲の弾倉を直撃し、誘爆を引き起こしたのだ。

「俺たちも行くぞ！」

アメリカ陸軍 B29 戦略爆撃機



全長	30.18m
翼幅	43.05m
全備重量	49,896kg
発動機	R-3350-23 2,200馬力×4 基
最大速度	587km/時
航続距離	5,230km
兵装	12.7mm機銃×10丁、20mm機銃×1丁 爆弾 最大9トン
乗員数	11名

B29は、現行の主力爆撃機であるB17やB24とは異なり、最初から敵国の軍事施設や社会資本を直接攻撃する戦略爆撃機として開発がスタートした。ボーイング社が数々の難問に挑みつつ完成させた機体は、様々な新機軸を採り入れることによって、高高度飛行性能と長距離飛行性能に加え、大きな爆弾搭載量と強力な自衛火器を兼ね備える超高性能機となった。この究極の爆撃機は、今次大戦における米軍の切り札として、太平洋戦線のみならず、すべての連合国将兵の大きな希望となっている。

香取は、及川に声をかけた。

「屠龍では分が悪い。黒龍も戦闘に参加し、敵機の阻止に努めなければならない。」

「左前方に敵編隊。まだ、味方は取り付いていません！」

「了解！」

及川の報告を受け、香取は左の水平旋回をかけた。操縦桿を手前に引き、エンジン・スロットルをフルに開いた。

黒龍が加速され、緩やかな角度で上昇を開始する。

「距離一〇〇……八〇〇……六〇〇……」

電探が示す数字を及川が読み上げ、B 29の機影が見え始める。

機体の右半面が、東から差し込む月光を反射しているのだ。

「技量『甲』の視力を舐めるな、米軍」

唇を軽く舐め、香取は呟いた。

陸軍航空隊の操縦者は、広大な満州で作戦行動

を行えるように訓練されている。

夜間飛行の際は、南満州鉄道の線路に反射する月光を頼りに、位置を把握するのだ。

B 29の反射光は、満鉄線路のそれよりはつきりしている。満州で何度も夜間訓練を行った身には、視認は容易だ。

一旦、高度五五〇〇まで上昇する。

梯団の最後尾にいるB 29に狙いを定め、操縦桿を前方に押し込む。

黒龍の丸っこい機首が下がり、機体が降下を開始する。照準器の環が捉えたB 29の反射光が近づいて来る。

「喰らえ！」

一声叫び、発射把柄を軽く握った。

大小四条の火箭が、コクピットの真下と両翼の付け根付近からほとばしり、発射の反動を受けたコクピットが振動した。

黒龍の兵装は、胴体下面の三〇ミリ機関砲二門と、

両翼の付け根に設けた二〇ミリ機関砲二門。屠龍の火器より破壊力が大きい。

硫黄島で、多数のB 17、B 24を屠^{ほふ}って来た重火力が、B 17、B 24よりも防御装甲が厚いB 29目にかけて火を噴いたのだ。

真つ赤な太い曳痕が、B 29の太い胴体に突き刺さり、火花と共に黒い塵^{ちり}のようなものが飛び散る。

B 29は僅かに揺れたように見えたが、火を噴く様子も、落伍^{らくご}する気配もない。胴体に命中したため、致命傷とはならなかったようだ。

B 29の尾部に発射炎が閃き、反撃の銃火が噴き延びる。一二・七ミリ弾の青白い火箭が、香取機の主翼をかすめ、後方に消える。

香取は、操縦桿を左に倒す。

黒龍が左に旋回し、敵の機影が右に流れる。

双発の重戦闘機だが、運動性能は軽快だ。機名の通り、黒い龍が天空^{てんくう}を自在に飛び回っているようだ。

香取は二度目の射弾を放つ。

重々しい連射音と共に、四条の火箭がほとぼしる。三〇ミリ機関砲はコクピットの真下に位置しているだけに、発射の反動は強烈だ。一連射を放つたび、尻を突き上げられるような気がする。

三〇ミリ弾と二〇ミリ弾の火箭は、狙い過たず、B 29の左主翼に突き刺さる。

補助翼を引きちぎったのか、細長いものが後方に飛んだ。

同時に、二番エンジンから炎と黒煙が噴き出した。火災炎はみるみる拡大し、B 29の巨体を闇の中に浮かび上がらせた。大量の黒煙が後方に引きずられる様子が、はっきり見えた。

B 29は編隊から落伍し、高度を落とした。

閃光と共に左主翼が折れ飛び、機体は炎と黒煙を引きずりながら、真つ逆さまに墜落し始めた。

「やった！」

香取は、快哉^{かいさい}を叫んだ。

B 29は非常に防御力の高い機体ではあるが、決し

て墜とせない相手ではない。

香取と及川は、そのことをたった今実証したのだ。このときには、香取機以外の黒龍も、B 29に火を噴かせている。

速力、運動性、火力、そして夜間における探知能力で屠龍より遥かに優る夜間戦闘機は、B 29の後ろ上方、あるいは後ろ下方から猛速で肉迫し、三〇ミリ弾、二〇ミリ弾を叩き込む。

直径三〇ミリの機関砲弾は、エンジン・カウリングを挟り取って火災を起こさせ、胴体に大穴を穿って、制御用のワイヤーを切断する。

銃塔に命中した三〇ミリ弾、二〇ミリ弾は、一撃で防御火器を沈黙に追い込む。

主翼や尾翼に命中した射弾は、補助翼や昇降舵を吹き飛ばし、機体の制御を失わせる。

満月の光の中、一〇機前後のB 29が黒煙を引きずりながらよろめき、あるいは炎を引きずりながら、墜落しつつある。

今年五月、初めて日本軍の戦闘機と交戦したときには、飛電二二型を寄せ付けなかったB 29だが、黒龍が持つ重火力と電探の探知力が、米軍の最新鋭四発重爆を、一機また一機と夜空に葬り去っている。

B 29の胴体上面と下面、尾部に発射炎が閃き、巨大な機体の周囲に青白い曳痕が乱れ飛ぶ。

黒龍一機が敵弾を浴び、火を噴く。

続いて二機目の黒龍が、真正面から敵弾を撃ち込まれる。

電探用のアンテナを吹き飛ばされ、コクピットを撃砕された黒龍は、火も煙も噴き出すことなく、真つ逆さまに墜落する。

彼が我が銃火が交錯する中、香取は二機目のB 29に取り付いている。

右に、左にと旋回を繰り返し、B 29の射弾をかくぐる。

一二・七ミリ弾の曳痕は、コクピットや主翼をかすめて後方に抜け、あるいは頭上を通過する。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。